

# 平成 30 年度調査研究課題 計画外部評価 結果

## 1 相模湾沿岸域におけるマイクロプラスチックの実態解明

### [総合評価]

- ・本研究課題は近年急速に注目を集めるようになってきた海洋プラスチック汚染に着目し、地元の相模湾沿岸を対象に実態解明を図るものであり、時宜を得た課題設定といえる。
- ・既に H29 年度に採取方法、分析方法の予備的な検討が行われたほか、実態把握についても傾向をある程度把握できるだけのデータが得られている。
- ・H30 年度には、マイクロプラスチックの由来の推定や吸着化学物質等の成分分析等を行う計画となっており、多くの新たな知見が得られることが期待される。
- ・化学物質の分析技術は当センターに多くの蓄積があるが、本研究課題で必要となる技術はその範囲を超えるものもあるので、他研究機関からの情報収集や協力関係の模索も必要と思われる。
- ・県議会からの要請も強いという報告があったので、人的体制の強化など、センター全体としてのサポートが重要と考えられる。
- ・初年度としては順調に進捗していると評価する。
- ・最終的な目的の一つは、「相模湾の海洋環境に対する MP 吸着・濃縮化学物質のリスクを評価」することとなっているが、これは、同湾に生息する生物に対するリスク評価を意味すると認識する。今回の計画では、これに至る道筋が明快でない印象を受けた。
- ・調査の容易性から、海岸漂着 MP の採取という調査方法を使用しているが、生態リスクに直接関与するのは、海洋中に存在する MP であろうと想像できる。海洋中 MP と漂着 MP の組成の違いについて考慮する必要があるのではないかと。特にサイズの小さい MP がどこまで採取できるかなどについて検討する必要がある。
- ・カタクチイワシを対象に魚体中の MP 調査を行うという計画は、生態リスク評価につなぐ意味で重要な計画であると評価する。他方、魚体中の化学物質濃度は体内 MP 由来だけでなく、他の経路（エラ、餌など）も存在するので、その区別についても検討する必要がある。
- ・現在、世界的規模で注目されるマイクロプラスチック（以下 MP）汚染について、実態調査を含む検討を行っている。特に県民のニーズに合致した検討課題である。相模湾での検討例はなく、サンプリング方法も含め、緻密な調査が行われている。平成 29 年度調査結果の粒径・材質の特性から河川の影響があることを推定し、平成 30 年度では、河川での MP の調査また、MP が化学物質を吸着等で運搬する可能性も一般的に言われているが、今年度は、特に PFOS（引地川での検出事例有り）、重金属等、に注力して検討をする計画となっている。内陸由来の化学物質についても、分配係数等も含め検討することが計画されている。また生物への取り込みに関しても魚類の調査も計画されており、今後の成果が期待される。
- ・行政ニーズに応える研究と考えられる。
- ・研究目的は、相模湾の環境リスクの評価だけではなく、対策も見据えた調査研究（発生源推測なども含まれている）となるよう計画書の書きぶりを見直されたい。
- ・重要な海流の情報についても、水産セクターとの連携の中で入手し、解析に活かしていただきたい。
- ・海外の既往研究も含め、湾内における調査事例があれば、比較検討されたい。
- ・試料採取において、県民参加型としている点について、県の研究センターならであり、高く評価できる。

### [数値的評価]

評価項目	評価の視点	評点				
		5	4	3	2	1
進捗状況	研究計画に対して適切に実施しているか	2人	2人			
	課題名、実施内容及びスケジュールに修正が必要か					
計画及び体制の妥当性	目的を達成するための今後の進め方は的確か	3人		1人		
	情勢の変化に対応した計画の変更が適切、的確に行われているか					

5点満点（標準3点）の評点で5～1点の絶対評価